中舍林太郎 著「江戸時代庶民の法の知識・技術
（二）（三） 宮飛騨国を中心にして名古屋大学法政論文集（二）（三）（三）

一 気鋭の日本近世法制史の研究者・中舍林太郎氏の学界における本格的なデビュー論文である。名古屋大学の紀要に三回分けて掲載され、合計百頁近くにも及ぶ大論稿である。

最初に、慣例によりその内容を、筆者の意図を可能な限り汲み取りつつ、整理・紹介しておきたい。

二 第二章「序論」においては、近世の法実務の担い手である「公事務に代表されるこれまでの膨大な研究史を拡げた手稿」が示されている。
第三章 法的知識・技術の利用

一貫して重厚さを感じるものであるが、評者としては差し

入されなければならないであろう。

第四章 法的知識・技術の広がりでは、江戸時代の庶

民が、幕府や藩の役人から法的知識や技術をいかにして入手

し、蓄積していったかに関して、具体的な事例を示しながら

が丁寧に述べられている。なお、高山は、限界とし

て注目値に、彼らのネットワークの形成という観的概念を

出している。第四章「法的知識・技術の広がり」では、江戸時代

の庶民が、幕府や藩の役人から法的知識や技術をいかにして生

まれ、蓄積していったかに関して、具体的な事例を示しながら

が丁寧に述べられている。なお、高山は、限界とし

て注目値に、彼らのネットワークの形成という観的概念を

出している。第四章「法的知識・技術の広がり」では、江戸時代

の庶民が、幕府や藩の役人から法的知識や技術をいかにして生

まれ、蓄積していったかに関して、具体的な事例を示しながら

が丁寧に述べられている。なお、高山は、限界とし

て注目値に、彼らのネットワークの形成という観的概念を

出している。第四章「法的知識・技術の広がり」では、江戸時代

の庶民が、幕府や藩の役人から法的知識や技術をいかにして生

まれ、蓄積していったかに関して、具体的な事例を示しながら

が丁寧に述べられている。なお、高山は、限界とし

て注目値に、彼らのネットワークの形成という観的概念を

出している。第四章「法的知識・技術の広がり」では、江戸時代

の庶民が、幕府や藩の役人から法的知識や技術をいかにして生

まれ、蓄積していったかに関して、具体的な事例を示しながら

が丁寧に述べられている。なお、高山は、限界とし

て注目値に、彼らのネットワークの形成という観的概念を

出している。第四章「法的知識・技術の広がり」では、江戸時代

の庶民が、幕府や藩の役人から法的知識や技術をいかにして生

まれ、蓄積していったかに関して、具体的な事例を示しながら

が丁寧に述べられている。なお、高山は、限界とし

て注目値に、彼らのネットワークの形成という観的概念を

出している。第四章「法的知識・技術の広がり」では、江戸時代

の庶民が、幕府や藩の役人から法的知識や技術をいかにして生

まれ、蓄積していったかに関して、具体的な事例を示しながら

が丁寧に述べられている。なお、高山は、限界とし

て注目値に、彼らのネットワークの形成という観的概念を

出している。第四章「法的知識・技術の広がり」では、江戸時代

の庶民が、幕府や藩の役人から法的知識や技術をいかにして生

まれ、蓄積していったかに関して、具体的な事例を示しながら

が丁寧に述べられている。なお、高山は、限界とし

て注目値に、彼らのネットワークの形成という観的概念を

出している。
吉田正志著『盛岡藩 雑書』にみえる近世前期の幕府人相書について「法学（東北大学）四十五」という資料を引用し、古文書の解釈を試みている。"はじめに"において、石井嘉助、平松義朗の論考を紹介し、近世の刑事手続を説明する際に毎年度の更新のように学生に紹介し、古文書の価値を理解するための手足としての役割を理解している。前人においては、人相書の制度が公事方御書によって整ったとしているが、後者においては『人相書』が一概に実効性があったとはいえないこと、人相書の効果は、その触を受けるための幕府役人や領主土地が人民へと達したものが、ねじれた知徹底の努力をはらったかによること、②人相書の効果は、その触を受けるための幕府役人や領主土地が人民へと達したものであることを明示し、しかも一般の効果・相書が紹介されているが、すでに慶安期には人相書が用いら

以下論が進められるのである。